

小森啓介先生を偲ぶ

山田和人（大学文学部教授）



小森啓助氏略歴

一九二二年六月三〇日生まれ。一九二六年京都市立大学部を卒業後、大津高等女学校教諭を経て、一九四六年大学科講師として入社。一九四七年太子科教授、一九四九年教養学部助教授、一九五一年大学経済学部助教授、一九五三年大学経済学部教授、一九五五年大学文学部教授に就任。一九七七年名譽教授。
一九九六年二月三日七時五十六分永眠 八五歳

小森先生との思い出を、思い浮かぶままに綴ってみた。

学部生時代、先生には、近世文学研究会の顧問を引き受けていただいていた。先生と懇談するのは、もっぱらコンパの席上であった。私たちは、とりわけ、集まりの悪い学生で、近世タイムなどと名付けて遅刻常習者の集団であった。先生は、いつも、誰よりも早く、聖護院の河道屋に到着なさっていた。結局、全員が揃うのに、三〇分はかかっていたかと思う。先生は、にこにこしながら待っていてくださった。今から思うと、大変な忍耐である。

その頃、研究会で扱っていたのは、先生の御専門の西鶴ではなく、近松が中心であった。先生は、研究会の活動そのものには、普段からあまりコメントはなさらなかった。学生に自由に学ばせること

を第一に考えておられたのであろう。

私たちの卒業論文の試問は、大学がロックアウトになっていたため、先生のご自宅の書庫で行われた。細かなことはよく覚えていないが、書庫の中にあつた、応接用の机の上にひろげられた自分の拙い卒業論文と、ゆったりとした和服で座っておられた先生の物静かな応対が妙に記憶に残っている。因みに卒業論文の提出も、その日の消印の分まで有効ということかたちの郵送であつたかと思う。

ゼミで卒業旅行をしようということになった。湖西線が開通した年だったので、「琵琶湖就航」と称して、湖西と湖東に泊ずつした。初日には、先生が連句を巻こうとおっしゃった。にわか連衆の句は、作法も何もなく、連句とはほど遠い出来であった。ただ、面白いことに、風流、風雅を愛され、物静かに暮らすことを尊

しとされていた感のある先生が、発句より、連句を好んでおられたことは意外でもあった。

私が大学院の時、小森ゼミの同窓会を企画する手伝いをさせていただいた。メンバーは、小森先生を師と仰ぐ一番弟子の、今は亡き植田一夫さんと、常に先生のお側で細やかな遣いをしてこられた柴山和子さんと、ほとんど学恩に応えることもできないままにいた私の三人であった。そうして、何回か会合を持ちながら、若き日の小森啓介先生の人となりに触れることになった。当日、たくさんの出席者の前で、気恥ずかしそうに照れ笑いをしながら、ご挨拶をなさっていた先生のお姿が今も目に浮かぶ。

飄々、はんなり、そんなお言葉が似合う先生であつた。

御冥福をお祈り申し上げます。

ある不器用な人生

—河野 収先生を偲んで—

山本雅昭（大学言語文化教育研究センター教授）



河野 収氏略歴

一九三〇年八月二〇日生まれ。一九六〇年大阪市立大学大学院文学研究科修士課程修了後、武庫川女子大学助教授等を経て、一九六六年工学部助教授、一九七二年工学部教授、一九九三年言語文化教育研究センター教授（所属変更）に就任。一九九一年には永年勤務者として表彰を受けられた。一九九六年名誉教授。
一九九六年二月二十九日六時一五分永眠 六六歳

ひとは死にゆく者からのみ学ぶ、とは誰の言葉であったか。

河野先生とはある雑誌でのおつき合いもあった。もう二十年余も昔のことである。先生の論文が同人の間で大いに物議をかましたことがある。文芸作品の解釈とは何か、作品の評価とは何によるものかを論じたその論文は、言えば文芸における方法と美学という、殆ど文学研究における究極の問題に正面から取り組もうとするものだった。誰もがこつこつと小さな仕事から始めるところを、いきなりずらりと大段平をひき抜いたのだ。大胆極まる、いや殆ど無謀な、一つ間違えば傲岸不遜とも言われかねない試みだったろう。じじつ批判はきびしかった。しかし先生のそれまでのお仕事事を慌てて見直したほくにはすぐ分かった。これは先生の生来の不器用さなのだ、と。それより

十年前、三十にしてすでに先生は全く同じ主題の論文を書いておられる。段平はとうに抜かれている、振りかぶった段平がいまだに振り下ろされなっているだけだ——そうぼくは思った。これ程の大段平、そう簡単に振り下ろせる訳がない。へたをするとなが身を打ち砕きかねない。苦しげな表情で立ち往生している先生の姿がぼくにははつきりと見てとれた。不器用なんだなと思った。そして、誠実な人だなとも思った。

それからまた十年の刻が流れた。ぼくらの教育の現場でも「ドイツ語教育の現状」だの「ドイツ語教授法」だのといった言葉が何か符牒のようにさかんに飛び交いだした。その間、先生の文章にも「日常ドイツ語」だとか、あるいは「情報処理」や「コムピュータ」といった流行語が頻出するようになってきた。ぼくは何

かしら鳩尾あたりにひつかかるものを感じていた。あるとき思いきつて尋ねてみた。——このごろ工学部でゲーテを読んでもおられるとか聞きましたけど……。すると先生は例の少しはにかなだような笑みを浮かべながら、ええ、ファウストをここの数年少しずつですが読み続けています、分かってても分らないでもいいんです、あの子らは学校を出たら二度とこんなもの読むことないでしょうからね、と言われた。不器用で誠実な河野収は健在だった。ぼくは、ひっかかっていたものがすうっと胃の腑に落ちていく思いで、黙って頭を一つ下げたことである。

平成八年師走、それは一つの生き方をめぐりに貫き通した人生の、静かな幕引きだった。（平成九年六月岩倉寓居にて）

故 田中順二先生を偲んで

馬杉一重 (女子大学元教授)



田中順二氏略歴

- 一九二二年二月一日生まれ
- 一九三六年三月 京都帝国大学国文学科卒業
- 一九五六年四月 同志社女子大学講師 (国文学)
- 一九六四年四月 同志社女子大学教授
- 一九七七年三月 定年退職
- 一九七七年一月一六日 昼二時四〇分永眠 八四歳

先生は、東京生まれの東京育ち、旧制東京高等学校を卒業して、京都大学の国文科へお入りになりました。

大学を出られてからは、京都を中心に教職につかれています。おかげで昭和三十一年四月には、同志社女子大学にお迎えすることができました。爾来ご定年まで二十一年間、本学で国文学をご担当下さったのです。その間、一般教育の主任、研究所長、図書館長の役職を兼務されましたが、先生の国文学に関する造詣の深さと、お人柄に接して、感動し、多くの学生が国文学に興味を持ち、心豊かな女性に育てられましたことは、本学にとって何よりも大きな恵みであったと深く感謝しています。

一方、先生は、京都大学の学生時代に歌壇「帯木」(ハハキギ)に入会し、編集部の一員として、後には主宰者として、

今日まで三十数年の長きにわたり、多くの会員の指導育成に力を尽くし、個人的には八冊の歌集、その他に多くのエッセイ集や文法書、あるいは学術書の刊行と、まことに多大な業績を残されました。

また、その間に、京都歌人協会の評議員をはじめ、日本歌人クラブの参与、関西短歌雑誌連盟会長や数多くの全国的短歌大会の選者をつとめるなど、現代短歌の指導的歌人の一人として、多くの功績を残されました。

また、ご在職中、先生が教職員組合の女子大学委員長でいらした時に、組合員のリクリエーションの一つとして、乞われるままに作って下さった教職員学内短歌会は、毎月ゼームス館二階の和室で、先生の定年ご退職の日まで続けられました。毎回、およそ十人程が集まり、時には大和方面へ吟行などおしゃれた旅をし

たこともあり、参加者にとって、忘れることの出来ない楽しい思い出の一つとなつていきます。

この歌会は、その後、全同志社へ枠を広げ、現在は同志社短歌会に引き継がれていて、歌誌「同志社短歌」創刊号を四年前に刊行しています。

先生が、現代日本の代表的歌人のお一人でいらした証しは宇治川河畔に歌碑として残されています。宇治川右岸、塔の島のすぐ近くです。ぜひ一度、お出かけ下さいませ。

何釣ると言へばもろこといふ子らに
宇治塔の島日はまだ暮れず 順二

(歌碑の歌)

故 川村あき先生を偲んで

吉岡幸子（女子中学・高等学校教諭）



川村あき氏略歴

一九九九年八月、九日生まれ。一九二〇年京都府立第一高等女学校国語漢文専科を卒業され、一九二七年同志社女学校教員。一九五二年には永年勤務者として表彰を受けられ、一九六四年に定年退職されるまで、三七年間の永きにわたり同校の教育に尽力された。一九九七年三月一日八時二分永眠。九七歳。

川村あき先生は、本年三月十四日九十歳でご他界なさいました。

ご葬儀の当日、昭和七年から昭和四十七年までの卒業年次を書き加えて、次々に差し出される名刺の整理に追われながら、ご退職後二十余年の歳月を経た今も、様々な年齢層の多くの卒業生が、最後のお別れに駆けつけるのは、先生のお人柄のなせる業との思いを深くしました。先生は、昭和二年同志社女学校に就職され、爾来昭和四十八年三月嘱託講師をおやめになるまでの四十数年を女子部の教育に専念されました。

この間、第二次世界大戦末期の昭和十九年には、女子挺身勤労令により、学業を捨てて工場へ動員された生徒と共に、伊丹の三菱、高野の鐘紡、今宮神社近くの京都精工などで、ご苦勞の多い日々を過ごされたかと伺っています。

先生との出会いは、戦後民主主義教育が声高に叫ばれ、新しい教育制度が発足して間もなくの頃でした。初めて創刊された生徒会新聞を『躍動』と名付けられたことから、先生の当時の意気込みを感じ取ることができました。当時一生徒であつた私は、いつも袖地の着物を丈短く着こなして足早に歩いておられる先生が、時たま見せられる洋装に、モガの片鱗を見る思いがしていましたが、先日、ご遺族の明田洋子様から、若い頃の先生のお宅には、若き日の関牧翁（元天龍寺管長）を始め、教師や画家など多くの逸材の出入りがあり、談論風発のサロン的趣があつたとお聞きして、大いに納得しました。民芸の家具調度でしつらえられた鷹ヶ峰のお宅に伺うごとに、政治に文学に時事問題にと広がる話題の豊富さに驚き、先生の旺盛な知識欲と鑑識眼の

鋭さに圧倒されていましたが、その源泉をかいま見た思いがしたからです。

先生は竹を割つたようなご性格で、巧言令色を好まれず、物事の本質を見抜く鋭さをお持ちでした。とりわけ齒に衣着せぬ鋭い寸評は、ドキリとすることはあつても、邪氣の無いものだけに、またお聞きしたくなるような心地よい刺激でした。先生のお宅を訪ねる卒業生が多かつたのも、先生のそんなお人柄に魅せられたのこだったと思います。

絵更紗に俳句にと、ご趣味も豊かな方でしたが、そのお人柄を彷彿とさせる先生の一句を記して、ご冥福をお祈りしつつ筆を置くことといたします。

ポンポンと 叩きたくなる 葱坊主

故 玉置保巳先生を偲んで

稲垣定弘 (女子大学嘱託講師)



一九二九年四月一日生まれ。一九五七年東京教育大学文学科独文学科卒業。一九五九年京都大学大学院文学研究科修士課程修了。一九六〇年同博士課程中退後、愛知大学教養部助教を経て一九七三年同志社女子大学助教。一九七八年同教授。一九九四年名誉教授。
一九九七年三月一九日二時五三分永眠 六七歳

玉置保巳氏は何より詩人であった。ドイツ文学者としての業績については、専門の方によって解明・評価されることであらうから、ここでは氏の詩人としての資質の特徴に若干触れ、追悼追想のよすがとしたい。

ある時、大岡信編集の詩歌誌『花神』(一九九〇年十号)に掲載された杉尾優衣の詩を氏に見せたことがあった。彼女は十五歳高校一年で自裁、たまたまその詩才が大岡の眼にとまり、遺稿詩集から数篇取り上げられたものである。数日後、氏から拒絶とはいかないまでもそれほど感銘しない旨の返答があった。思えば当然のことかもしれない。例えば彼女の詩句に、中学時代の美術教師について「ガンを胃を切り、九死に一生を得た五十八才」とか、彼女よりも先に逝った同年輩の少女に対して「もう一人の白い少女が、

まるでこの一枚の枯葉のように／くるりとまがり／あつげなくどこかへ行ってしまった／何の恐れもなく／やわらかい体を残して／虚無の世界へ旅に出てしまった」とあるように、人生の深淵を既に覗いている十五歳の少女の成熟の視線を氏は受け入れなかったということである。

氏にとってどのような女性心が心をとらえ、詩表現にまで駆るのか。「カリンは美しい金髪で、夢見るやうな青い瞳をしてゐる。／ぼくはカリンと話すたび、夢二の絵にある、どこか知ら／ない異国の少女に似てゐると思ふ。(……)『ほら、見てごらん』といふカリンのドイツ語は、とてもやさしい(詩集『海へ』「古城の春」カリンは氏がドイツ留学中に知ったポーランド女性で、一人の少年の母親でもある。氏にあっては女性も少女の心情を永遠に持ち続けねばならない。ちょうど氏

の夫人が現実にもそうであるように。

氏の男子に対する眼も同様の方向を見詰める。「うつむいて紅茶をすすつてゐたら、／まあ 可愛い。見てごらん ほらほら!」／と妻が叫んだので、いそいで目をあげた。／小川にわたしたコンクリートの橋の上で、今、ちひさな男の子がオシッコをしてゐる。オシッコは冬の日にキラキラきらめきながら綺麗な弧を描いて飛んでゐる。／天使のオシッコだ——と思った(同詩集「天使のオシッコ」)「見てごらん」と問う視線はまさに詩人の眼差そのものと重なる。無垢と優しさ、それが氏の詩心をそそるモチーフである。

清冽な詩人の六十七歳というまだ早い命終を惜しみつつ、その詩情に相応しいベルクの「ヴァイオリン協奏曲」を鎮魂の曲として捧げたい。

矢野秀雄先生を偲んで

木枝 燦 (大学名誉教授)



矢野 秀雄氏略歴

一九四二年二月一九日生まれ。一九六六年同志社大学工学部機械工学科卒業。一九六八年同志社大学院工学研究科機械工学専攻修士課程修了。一九八二年同志社大学工学部専任講師。一九八四年同志社助教授を経て、一九八九年同志社大学教授。
一九九七年四月二日二時一分永眠 五五歳

何故私がこんな病気になるかねばならぬのでしようね——たった一度矢野君がもらした言葉。思い出しても胸が痛む。(君と呼ぶことを許して頂きたい) 極めて厄介な病氣と長く闘いながら終始理性的で、教育も研究も疎かにせず、遂に五十五歳の若さで不帰の客となられた矢野先生。無念という外はない。

卒論、修論以来三十余年君とつき合った者として、思い出は尽きない。頭が鋭く、そして勉強家であった。徹底的に正確を期した。真に理科的だといえる人は多くはないが、矢野君は正に理科的であった。

基礎学力が極めてしっかりしていて、常に基礎に遡って物を考えた。いくら真理であっても事に当って不要なものは切り捨てる。その判断が的確であった。そのため廻り道のようにも結局仕事は早か

った。問題に対して既存の業績を素早く調査する、リテラチュア サーベイの能力が素晴しかった。そのせいで物事の本質に迫り、真実を把握する高い能力を身につけていた。鋭い観察力をもち——日本画家であられた祖考の血筋か——その結果を実に巧みな言葉で表現することができた。そこには独得のユーモアも含まれていて、思わずうまいと言ってしまっただった。理論家であり、かつ実験家でもあった。学生の指導もやさしく、さりげなく、上手であった。

常に真実のみを語り、きちんと約束を守る、信頼できる人物であった。いつも平静で決して怒ることはなかった。

矢野君の涙を二度見たことがある。卒論のとき、星名先生から聞いたことがもど一度叱ったことがある。

「台風が来るという」と君たち兄弟はお

父さんに言われて京都駅へ逃げるというのは本当か。お父さんお母さん、京都駅へ逃げて下さい。家は兄弟で守ります、というのが本当ではないか——すると彼は黙っていたが、ぼろぼろ涙をこぼした。内向的であったのが友達の世話をするようになった。

三月三日に入院、十日に不幸にも肺炎。四月十二日、病院に見舞った。口にパイプが挿入されていて物も言えず痛ましかった。私をじっと見つめていて、ぼろろと涙が浮かんだ。これからというときに無念だったろうし、私も無念で手を握っている外どうしようもなかった。

今ごろは天国で、相変らず静かに好きな研究を続けていることだろう。しかし現にそこにいるようにも思われる。君のことは忘れない。ご冥福を祈る。

故 八木鉄男先生を偲んで

深田三徳（大学法学部教授）



八木鉄男氏略歴

一九三四年二月二日生まれ。一九四七年同志社大学法経学部卒業後、同大学院法哲学専攻を修了し、一九五五年同大学法学部助教。一九五八年教授、一九六二年法学研究科教授に就任。その後、同大学人文科学研究所長、同大学法学部長を歴任された。
五月七日一九時二〇分永眠 七三歳

八木先生は一九九七年五月七日に永眠された。昨年末に倒れられ、一時退院されていたが、四月に病状が悪化し、帰らぬ人となった。先生は、一九五五年から約三十九年間、法学部に在職された。ご専門は法哲学であり、研究のかたわら、法学部長、人文科学研究所長などを歴任された。また多くの研究業績を発表され、長い間、日本法哲学会の理事として活躍された。

私が先生を最初に知ったのは、一九六三年の大学の法哲学講義においてである。先生は、隣の教室にまで届くようなよく通る高い声で、教壇を行ったり来たりしながら講義をされていた。小さな身体のエネルギー全部を講義に注いでおられる姿が印象的であった。内容は、古代から現代までの法哲学の歴史を自然法論と法実証主義の対立軸を中心にして説明

しようとしたものであった。先生は一般教育の法学の講義もされていたが、それも名講義であった。先生は、退職講演（一九九三年十二月）のなかで、大学の教師が講義に行くのは武士が戦場に行くようなもので真剣勝負だ、手を抜いてはいけない、どこから矢が飛んでくるかわからないと仰っていた。講義と学生を人一倍大事にするというのが、先生のモットーであった。

先生はもともとドイツのラートブルフやケルゼンなどの法哲学を研究されていた。しかし本学に赴任された頃から、イギリス法哲学に関心を向けられるようになった。第二次大戦後、ナチス・ファシズムへの反省ということで、「自然法の復活」が言われ、「法律は法律だ、文句を言わずに従え」という法実証主義が批判された。しかし先生は、ドイツと比べて比

較的スムーズに進展してきたイギリス型の法実証主義には可能性があると考えられ、十九世紀のJ.オースチンを中心とする分析法学の研究を開始された。その成果が『分析法学の潮流』（ミネルヴァ書房、一九六二年）、『分析法学の研究』（成文堂、一九七七年）、『分析法学と現代』（成文堂、一九八九年）であり、英米法哲学研究の古典として高い評価を得てきたものである。

先生は、大変温厚な人柄で、多くの学生や研究者に慕われていた。また先生は大変な動物好き、犬好きで、日本スコテイツシュ・テリア協会理事、同協会本部審査員を務められていた。もしも生まれ変われるとすれば、今度は動物学の研究をしたいと仰っていた。今、天国で動物に囲まれて楽しくしておられるのではないかと思います。ご冥福をお祈りします。